

【実践報告】

学生のキャリアに対する関心を高める取り組み

～2024年度BMS（Bunkyo Management System）人間福祉学科地域連携活動 実施報告～

中嶋 一恵

山地 恭子

中村 卓治

Kazue Nakashima

Kyoko Yamaji

Takuji Nakamura

太原 牧絵

河内 佑美

山田 あかり

Makie Tahara

Yumi Kouchi

Akari Yamada

キーワード BMS（Bunkyo Management System） 学生 キャリア教育 講話

I. はじめに

広島文教大学人間科学部人間福祉学科は、これまでキャリア教育・就職支援の取り組みをBMS（Bunkyo Management System）のテーマとして取り上げ、様々な活動を実施し、その結果を本学会誌にも報告してきた（坂井ほか、2021；河内ほか、2023；棚田ほか、2024）。その流れを受けて今年度は、前年度実施のBMSを発展的に引き継ぎ、地域連携活動BMSの一環として「学生のキャリアに対する関心を高める」ことを目的として取り組みを行った。

ところで、日本において「キャリア教育」という言葉が公的に登場し、その必要性が提唱されたのは、1999年（平成11年）12月に出された中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてであり、ここではキャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要があることが提言されている。さらに、2011年（平成23年）1月には「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」と題した中央教育審議会の答申において、キャリア教育と職業教育の基本的方向性や視点が示された。この中では、高等教育機関におけるキャリア教育は、キャリア教育と職業教育の2つの教育観点をもとに進められることで、キャリア形成の支援機能が充実すると考えられる。ちなみに、本答申では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義している。また、職業教育は「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」とし、これらの知識や技能の育成は、学校教育のみで完成するものではないため、生涯学習の観点を踏まえた教育の在り方を考える必要があるとしている。

以上の流れを踏まえ、今年度は、学生の職業選択に資するだけでなく生涯学習の視点に立ち、「生涯にわたりそれぞれの社会人・職業人としてのキャリア形成」（中教審答申2011、20頁）を支援する目的で、福祉職従事者（主に本学科卒業生）の講話を実施した。こうした社会人による講話の教育効果として、三川（2017）は学生の社会形成力（社会人としての自己を形成する能力）や職業理解力（目標とする職業に就くための進路選択を考える能力）に影響があったこと、吉田（2021）は職業キャリア計画性（将来の見通しを持って計画的に取り組むこと）が高まったことを報告している。そして、社会人講話は、学生のキャリア意識に影響を与え、学生が進路選択を現実的に考える契機になっている可能性を示唆している。

そのため、講話者には、福祉現場の具体的な状況や仕事内容だけでなく、失敗談や気持ちの切り替え方、転職の理由、人生設計や人生の目標、結婚・出産と仕事のバランス、学生時代にやっておくことなど、学生のキャリア形成に役立つような経験を語ってもらうように依頼した。また、キャリア形成の観点から、本取り組みの主要対象者は本学科在籍の2年生としたが、就職活動の最中である4年生やそれ以外の学年にも開催を周知し、参加を呼びかけた。本稿は、こうした2024年度の活動を、各講話後に実施したアンケート調査をもとに報告するものである。そして、学生のキャリア形成に対する支援方法の一助を得ることを目的とする。

II. 実施方法と内容

1. 対象学生と実施方法

今年度の取り組みは、2024年度人間福祉学科2年生の育心プログラムの時間に全5回実施した。ただし、第1回、第2回は4年生との合同開催であり、また、毎回、他学年にも講話の開催について周知し、参加を呼びかけた。講話は、学生が自らの将来像を描きやすいように、多様な領域の福祉職従事者で主に本学科卒業生を選定し、学生のキャリア形成に資するような経験をお話いただくよう依頼した。ただし、第4回は卒業生ではなく地域で自立支援を行っている方に講話をお願いした。終了後、参加者にはアンケート記入を求めた。

開催回および実施日時	講 師	講話テーマ
第1回 2024年6月5日	社会福祉法人A 作業所 利用者および生活支援員	福祉現場の状況と生活 —福祉を理解し、将来像を描くために—
第2回 2024年7月10日	NPO 法人B 相談支援事業所 相談支援員	福祉専門職が目指す自己実現 —学生が自らの将来像を描くために—
第3回 2024年10月2日	C 医療法人 精神保健福祉士	福祉専門職に就いて成長したこと
第4回 2024年11月6日	D 若者自立支援団体 代表	これからの福祉とは —これまでの出会いと人生から考える—
第5回 2024年12月4日	社会福祉法人E 施設 介護福祉士 および本学人間福祉学科 助手	福祉専門職の魅力と人生設計

2. アンケート調査方法

(1) アンケートの手続き

毎回講話後にアンケートを実施した。アンケートにはMicrosoft Forms を使用し、調査用QR コードを作成、協力依頼文書にこのQR コードを記載して配布した。参加学生には協力依頼文書および口頭による説明を行ったうえで、オンライン上での回答を依頼した。

(2) 調査票作成の手続きとアンケートの質問内容

BMS 担当である筆者らが議論を重ねて、質問項目を作成した。そのうち、本稿に関連する質問内容のみを以下の通り記載する。

① 今回の講話の内容はためになったか

「0：全くそう思わない」「1：そう思わない」「2：あまりそう思わない」「3：どちらとも言えない」「4：ややそう思う」「5：そう思う」「6：とてもそう思う」の7件法で尋ねた。

② 以下の事柄に対して、講話の内容が役に立ったか

大学での学修、学外実習、就職活動、人生・生き方、キャリア形成の各項目について、「0：全くそう思わない」「1：そう思わない」「2：あまりそう思わない」「3：どちらとも言えない」「4：ややそう思う」「5：そう思う」「6：とてもそう思う」の7件法で尋ねた。

③ 講話を聞いて良かった点について（自由記述）

(3) 分析方法

調査フォームにおいて、上述した質問項目に回答した学生を分析対象者としたうえで、質問項目ごとの分析対象者の回答の平均値や標準偏差を算出した。

(4) 倫理的配慮

回答は自由意思であること、得られたデータは数値化し個人が特定できないように処理をすること、適切に管理を行い個人情報情報を保護すること、以上の内容を依頼文および口頭にて説明したうえで、アンケートの回答をもって同意が得られたこととした。

Ⅲ. アンケート結果

1. アンケート回答者の概要

各回の講話参加者、アンケート回答者、回答率は（表1）の通りである。

なお、第1回、第2回の参加者に4年生が多い理由は、2年生4年生合同で育心プログラムを実施したためである。第3～第5回は、2年生の育心プログラムで講話を実施した。1年生、3年生には、メールで開催通知を送り、第1～5回全てで参加者を募った。

（表1）参加者数および回答率

	参加者数 (人)	回答者数 (人)	回答者数：内訳（人）				回答率 (%)
			1年生	2年生	3年生	4年生	
第1回	81	69	0	29	1	39	85.2
第2回	75	68	1	32	1	33	90.7
第3回	40	37	1	33	2	0	92.5
第4回	30	27	2	22	4	0	90.0
第5回	30	26	2	20	4	0	86.7

※回答率は、小数第2位を四捨五入

2. アンケート結果の概要

(1) 講話の内容の有用度について

講話の内容について、「講話の内容がためになったか」との問いに関する結果は、（表2）のとおりである。全体的に平均値が高いため、参加した学生は講話を聞いて役に立ったと一定の評価をしていることが窺える。その中で、第2回は、他と比べて平均値が低めで標準偏差が大きいため、講話の内容を共感できた学生とそうでない学生の分散があったことが推測される。

（表2）講話の内容の有用度

	有効N（人）	平均値	標準偏差	最小値	最大値
第1回	69	5.435	1.091	1.000	6.000
第2回	67	4.896	1.361	0.000	6.000
第3回	37	5.405	0.762	3.000	6.000
第4回	27	5.593	1.010	1.000	6.000
第5回	26	5.808	0.491	4.000	6.000

(2) 項目別有用度について

講話の内容の有用度をより具体的に理解するため、「大学での学修」「学外実習」「就職活動」「人生・生き方」「キャリア形成」の5項目で質問を行った。結果は、（表3）～（表7）のとおりである。全体的に見ると、いずれの項目も高い評価がなさ

れており、講話の内容が学生生活の様々な面において何らかの影響を与えることができていることが読み取れる。ただし、第2回の「大学での学修」が平均値4.925、「キャリア形成」が平均値4.896と、他の回に比べて低く標準偏差が高い傾向にあるため、その講話の内容を評価した学生とそうでない学生の分散があったと推測される。

また、各回の5項目の平均値のうち、「就職活動」に対する有用度が第1回5.319、第2回5.075、第3回5.351、第5回5.731と第4回を除いて最も高いことが見て取れる。これは、学生が今年度の講話をその目的であるキャリア形成としてではなく就職活動に役に立つ情報として捉えている可能性があることを示している。

(表3) 「大学での学修」に対する有用度の要約統計度

	有効N (人)	平均値	標準偏差	最小値	最大値
第1回	69	5.203	0.948	0.000	6.000
第2回	67	4.925	1.078	1.000	6.000
第3回	37	5.351	0.633	4.000	6.000
第4回	27	5.593	0.844	2.000	6.000
第5回	26	5.615	0.496	5.000	6.000

(表4) 「学外実習」に対する有用度の要約統計度

	有効N (人)	平均値	標準偏差	最小値	最大値
第1回	69	5.304	0.912	0.000	6.000
第2回	67	5.075	1.049	1.000	6.000
第3回	37	5.324	0.818	3.000	6.000
第4回	27	5.630	0.629	4.000	6.000
第5回	26	5.654	0.485	5.000	6.000

(表5) 「就職活動」に対する有用度の要約統計度

	有効N (人)	平均値	標準偏差	最小値	最大値
第1回	69	5.319	0.931	0.000	6.000
第2回	67	5.075	1.020	1.000	6.000
第3回	37	5.351	0.676	4.000	6.000
第4回	27	5.630	0.629	4.000	6.000
第5回	26	5.731	0.452	5.000	6.000

(表6) 「人生・生き方」に対する有用度の要約統計度

	有効N (人)	平均値	標準偏差	最小値	最大値
第1回	69	5.290	0.925	0.000	6.000
第2回	67	5.060	1.013	1.000	6.000
第3回	37	5.297	0.661	4.000	6.000
第4回	27	5.852	0.456	4.000	6.000
第5回	26	5.615	0.496	5.000	6.000

(表7)「キャリア形成」に対する有用度の要約統計度

	有効N (人)	平均値	標準偏差	最小値	最大値
第1回	69	5.246	0.914	0.000	6.000
第2回	67	4.896	1.116	1.000	6.000
第3回	37	5.297	0.618	4.000	6.000
第4回	27	5.704	0.542	4.000	6.000
第5回	26	5.615	0.496	5.000	6.000

(3) 学年による項目別有用度の比較

第1回および第2回は、2年生と4年生を対象としていたため、それらの回の各項目の有用度について比較を行った(表8)。これにより、第2回において、4年生の平均値がどの項目においても低いことがわかる。たとえば、大学での学修の場合、第2回の4年生の平均値は4.636であり、第1回の5.205や、第2回の2年生の5.156よりも低い。ここから、前述した講話の内容の有用度および項目別有用度において、第2回がいずれも平均値が低い結果となった理由は、4年生の評価が低い傾向にあったためだと考えられる。

(表8) 2年生と4年生との有用度の比較

	大学での学修		学外実習		就職活動		人生・生き方		キャリア形成	
	平均値 (標準偏差)		平均値 (標準偏差)		平均値 (標準偏差)		平均値 (標準偏差)		平均値 (標準偏差)	
	2年	4年	2年	4年	2年	4年	2年	4年	2年	4年
第1回	5.172 (1.197)	5.205 (0.732)	5.241 (1.185)	5.333 (0.662)	5.172 (1.227)	5.410 (0.637)	5.207 (1.177)	5.333 (0.701)	5.138 (1.156)	5.308 (0.694)
第2回	5.156 (0.847)	4.636 (1.220)	5.406 (0.665)	4.697 (1.237)	5.406 (0.560)	4.697 (1.237)	5.344 (0.653)	4.727 (1.206)	5.125 (0.871)	4.606 (1.273)

(4) 自由記述「講話を聴いてよかった点」の結果

(第1回)

この回では、本学科卒業生とその就業先の利用者が講話者であり、福祉現場の状況や利用者の生活、業務内容や利用者による職員への思いなどを語ってもらった。感想で一番多かったのは、福祉現場について理解が深まったことである。具体的には、「障害福祉現場で働くことや、支援の内容がよくわかった」「利用者を仲間として捉え、利用者主体で支援を行っていることが分かった」などである。次に、当事者の声を直接聴いたことである。「利用者が施設や職員に対してどのような思いを持っているのか聞いた」ことを良かったと述べる意見が多くあった。その他、「障害福祉分野について詳しく知らなかったので、関心がわいた」「卒業生のお話をきくことができたのが良かった」「今日の話から大学生活を送るうえで大切なことに気が付いた」「就職活動の参考になった」との意見が複数あった。

(第2回)

この回では、本学科卒業生が卒業後に歩んだ福祉の道を、悩みや葛藤、転職などの人生の様々な経験を交えて語ってもらった。感想の中には、「転職をしながら、自分のやりたいことを突き詰めることができることが分かった」「人との出会いが大事」「いろいろな人生がある」「選択肢が広がった」等の意見が複数見られた。一番多かった意見は、挑戦することの大切さであった。例えば、「自分の考えを持ち、行動に移すことが大切だと分かった」といった意見である。行動力や経験を重ねることの大切さを多くの学生が良かった点にあげていた。

(第3回)

この回では、医療現場で活躍する本学科卒業生に、業務内容や仕事のやりがい、葛藤、大学時代の経験などについて語ってもらった。感想で一番多かったのは、福祉現場を知ることができたことであった。具体的には「精神科病院での仕事内容や患者の様子などを知ることができた」「精神科病棟での退院支援について知ることができた」「現場の話がきけて実習に向けての不安が和らいだ」等の意見があった。その他、国試対策について把握できたことや、就職活動のイメージがついたこと等もあった。

(第4回)

この回では、若者自立支援を行っているNPO法人の代表者に、これまでの人生経験や法人を立ち上げた理由、支援の内容、学生へのアドバイスなど、学生時代の過ごし方やこれからの生き方につながるような内容を語ってもらった。感想で一番多かったのは、「これからの人生をおくるために参考になった」との意見が他の講話と比較して多かった。具体的には「自分の視野を広げる」「経験値を増やす」「人生において大切な言葉を教えてもらった」等の意見が多数あった。その他、人としての価値や仕事のイメージがついたなどがあった。仕事のイメージについては「人生に悩んでいる人に寄り添い、一緒に悩んで考えて生活しながら関係をきついでいくこと」「生きづらさを感じている時に、救ってくれる場所である」等があった。

(第5回)

この回では、介護現場に勤めている卒業生と本学科助手に、福祉現場での業務内容や悩みなどの福祉職に関することだけでなく、結婚や出産などのライフイベントやライフワークバランスといった、学生が卒業後経験するであろう人生のイベントと福祉職についても語ってもらった。感想で一番多かったのは、「就職後のイメージがついた」ことである。具体的には、「職場での人間関係について知れた」「辛いこと」「やりがい」などであった。次に、ボランティアへの参加意欲や学生生活に必要なことがわかったことが挙げられた。その他、「女性の働き方を知ることができた」があり、具体的には「仕事内容だけでなく、結婚、出産との両立についての話を聞けるようになった」「女性として結婚、出産は大きなライフイベントだと改めて感じた」などがあった。

IV. 考察

以上の結果から、今年度実施した福祉従事者による講話に対する学生の評価は全体的に高いものであることが明らかになった。また、学内外での福祉職に関する学修だけでなく、生き方やキャリア形成といった人生の指針となるような項目についても示唆を得ることができたようで、本講話の目的である「生涯にわたりそれぞれの社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する」という点について、一定の効果があつたのではないかとと思われる。

5回実施した講話に対する学生のアンケートから、以下の点を指摘できるであろう。

①参加した学生は、福祉現場や福祉職の具体的な状況や内容に関心がある

第1回・3回・5回は、講話テーマに示されるように福祉現場の状況や業務内容、就業形態などといった具体的な福祉業務を講話の柱としたものであった。(表2)にあるように、これらの回の講話の有用度の平均値はいずれも高く、また、自由記述でも「障害福祉現場で働くことや、支援の内容がよくわかった」などの福祉現場の理解につながったことを示唆する回答が多い傾向が見受けられた。このことから、学生は学外実習や就職など今後自らが経験する福祉現場の実際に対する関心が高いことが窺える。

②講話のテーマと学生の講話を聞く観点が合致していない可能性がある

第2回の講話は、今年度の講話の目的である「生涯にわたりそれぞれの社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する」ことにつながる「自己実現」をテーマにしたものであった。そのため、講話者には本学科卒業後からこれまでの人生の岐路と選択、転職とその理由などについても話していただいた。その結果、(表2)～(表8)に見られるように、この回は他の回に比べて有用度の平均値が低く標準偏差も高い傾向となった。これは4年生に特に顕著で、講話のポイントが響いた学生とそうでない学生との分散が生じたことを示している。4年生は、2年次後期からこれまでこのような講話を「福祉職の理解と進路

選択の材料」として聞いてきたため（棚田ほか、2024）、今年度も同様の観点で講話を聞いていたことが理由として推測され、これが講話の内容と4年生の観点の差異につながり、回答傾向に表れたのではないかとと思われる。またこのことは、各回の5項目の平均値のうち、「就職活動」に対する有用度が第4回を除いて最も高いことでも窺える。4年生だけでなく2年生にとっても、今年度の講話がその目的であるキャリア形成ではなく就職活動に役に立つ情報として捉えていた可能性があることを示している。

ところで、アンケート結果ではないが、講話を運営するにあたって気がかりな点として、回を追うごとに参加者数が減少していることをあげておく。これには、第3回以降は4年生の育心プログラムが講話とは別の内容になったため、第1回、2回の参加者数の半減となったことは仕方がないこともあるが、それでも2年生もそれ以外の学年の参加も思うように伸びなかったことは企画する教員として無視できないことである。参加した学生の評価は高かったものの、次も参加したいと思わせるような魅力にはつながらなかったのかもしれない。また、現プロジェクトメンバーとしての取り組みが今年度から開始ということもあり、年間を通した講話のスケジュールやデザインを開始当初に学生に周知することができなかったことも参加者の減少に影響を与えている可能性も考えられる。

V. 今後の課題

前述したように、福祉現場や福祉職の実際について福祉従事者から直接話を聞く講話は、参加した学生にとって有意義なものとなったようである。ただし、これを実施するにあたって次のような課題も明らかになった。

まず、学生だけに限らないが、参加者は現在の自身の関心に沿って講話を聞く傾向にあるため、講話の実施前にテーマや聞くための観点の確認を行った方がより目的に沿った学びにつながるのではないかとということである。また、今年度の講話において、これから経験する学外実習や就職などの参考情報として福祉現場の実際について関心が高いことが認められたため、そうした学生の関心に沿ったテーマ設定も引き続き検討していく必要性を感じた。

そして、これとともに、講話の主な対象をどの学年に設定するかについても検討が必要である。学外実習や就職活動が終了している4年生とこれから経験する学年では、学生の関心も当然のことながら異なってくる。また、講話をその年度だけでなく在学期間の4年間にわたって聞くことができるようにするならば、スケジュール設定や学年によって聞く観点に差を設ける等の工夫も必要となってくるだろう。

さらに、参加者数の問題も検討課題にあげられる。実施時期や時間、講話のテーマや内容、講話者の選定、参加促進方法など、再度見直しが必要である。また、授業内で講話の内容の事前学修や事後の振り返りの時間を設けて授業と関連を持たせるなど、学生が自ら参加してみようとするための仕掛けも必要かもしれない。

福祉従事者に福祉現場の実際や経験などを直接話していただくことは、授業内で教員から学ぶこととは異なる現場の真実味ややりがいなどを学ぶことにつながり、学生にとって福祉職に就くことの意識づけや将来像の形成につながっていく。こうした講話の意義を踏まえ、より学生にとって有益で魅力的な講話の実施を検討していきたい。

参考文献

- ・中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」1999年12月
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm
- ・中央教育審議会 大学分科会 質保証システム部会「大学における社会的・職業的自立に関する指導等（キャリアガイダンス）の実施について（審議経過概要）」2009年12月
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1288248.htm
- ・中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」2011年1月
https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11402417/www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf

中嶋 山地 ほか：学生のキャリアに対する関心を高める取り組み

- ・宮入小夜子「社会人との対話が学生の職業観・勤労観の形成に与える影響—キャリア教育に関する準実験による実践的研究—」『日本橋学館大学紀要第12号』2013年、pp. 17-30
- ・三川俊樹「職業としての心理学—キャリア教育の視点からみた効果について」『追手門学院大学心理学論集第25号』2017年、pp. 51-57
- ・吉田尚子「社会人講話が大学生のキャリア意識に与える影響」『追手門学院大学経営学学生論集第26号』2020年、pp. 1-17
- ・坂井晶子・太原牧絵・河内佑美「人間福祉学科における就職支援に対する満足度向上のための方策とその実施・検証についての報告」広島文教大学『人間福祉研究第19号』2021年、pp. 33-43
- ・河内佑美・太原牧絵・坂井晶子「人間福祉学科におけるキャリア教育の実践と評価について」広島文教大学『人間福祉研究第21号』2023年、pp. 20-26
- ・棚田裕二・河内佑美・山地恭子・中嶋一恵「学生のキャリアに対する関心を早期に高める —2023年度 BMS (Bunkyo Management System) 実施報告—」広島文教大学『人間福祉研究第22号』2024年、pp. 12-23